（ 続紙 １ ）

京都大学	博士（　人間・環境学　）	氏名	古川 真宏
論文題目	世紀末ウィーンにおける芸術と精神医学		

（論文内容の要旨）

本論文は、表題のとおり世紀末（正確には19世紀末から20世紀初め）のウィーンにおける芸術と精神医学との密接な関係を考察するもので、三部構成の全六章からなる。それぞれ二つずつの章を持つ各部の構成は以下のとおりである。第Ⅰ部「空間と身体」は第1章「世紀末ウィーンのホワイト･キューブ――分離派館とプルカーズドルフ･サナトリウム」と第2章「クリムト的女性像――ヒステリー的ファム・ファタルと神経衰弱的ファム・フラジール」、つづく第Ⅱ部の「様式と装飾――退廃と進化」は第3章「浮薄なる様式――スタイルとしてのモード」と第4章「装飾とセクシュアリティ――分離派とアドルフ・ロースの装飾観」、そして第Ⅲ部「トラウマとトラウム」は第5章「肖像としての人形――オスカー・ココシュカのアルマ人形をめぐる一考察」と第6章「アルフレート・クービンにおける夢と記憶――1909年から1930年代の作品と言説を中心に」である。このように、美術と建築とデザインをまたいで､1900年前後のウィーンの芸術を独自の観点から包括的にとらえなおそうとする点に本論文の顕著な特徴がある。

まず第Ⅰ部「空間と身体」において、神経衰弱とヒステリーという当時流行の病が芸術に与えた影響の大きさが､建築空間と身体表現を具体的に分析することで読み解かれていく。第1章で明らかになるのは、新しい美術の展示空間（分離派館）と、当時ウィーン郊外に次々と建設されたサナトリウムの空間とが、意外にも「白い立方体（ホワイト・キューブ）」という共通の性格を持ち、いずれも「近代生活からの避難所」としての機能を果たしていたという点である。第2章では、当時から賛否両論を巻き起こしたクリムトの描く女性表現が、ヒステリーや神経衰弱をめぐる言説とも交差することで、病理学的身体の審美化という側面を有することが論じられる。このように、建築空間の心理学化と理想的身体の解体という世紀末ウィーンの芸術の二大特性は､精神医学の言説及び図像とのあいだで双方向的な関係を切り結んでいたのである。

つづく第Ⅱ部「様式と装飾――退廃と進化」では、チャールズ・ダーウィンやチェーザレ・ロンブローゾに端を発する「進化」や「退廃」の理論が、芸術の分野において進歩史観的な美的モデルとして利用されたこと、さらに「装飾」をめぐる当時のかまびすしい論争において、「カタルシス」「フェティッシュ」「昇華」等という精神分析的な概念とのアナロジーが見いだされることが論じられる。とりわけ、具体的な芸術作品や理論的言説の詳細な分析に基づいて、世紀末美術における合理主義と装飾主義という相反する傾向が、それぞれ「自然選択」と「性選択」に大きく対応するという、注目すべき仮説が提示

される。第4章では、無装飾主義を唱える建築家アドルフ・ロースと、装飾を歓迎する分離派の総合芸術とを突き合わせることで、一見したところ両者は相対立するようにみえながらも、同じコインの両面であることが明らかにされる。すなわち、ダーウィンの「性選択」やフロイトの「フェティシズム」をめぐる理論を参照しつつ、「装飾」を、性的な欲望の代替的な充足手段として解釈しなおすことで、装飾の否定の裏には欲望が、肯定の裏には防衛機能が隠れている、というわけである。

最後に第Ⅲ部「トラウマとトラウム」では、主にオスカー・ココシュカとアルフレート・クービンの特異な絵画作品を取り上げ、無意識や妄想、夢や記憶をめぐる当時の心理学や精神分析――とりわけフロイトの理論――とのあいだに内在的な関係があることが明らかにされる。ココシュカはかつての恋人をかたどった等身大の人形をつくらせ、しばらくのあいだ、それを本人であるかのようにフェティッシュに寵愛するとともに、人形とのツーショットの自画像も数点制作している。それは従来、失恋のトラウマからの回復手段と解釈されてきたが、本論文ではそれにとどまらず、この画家の本領でもある肖像画制作の一環としてとらえなおされていく。すなわち、対象に自己を投影させることで、仮構的な人格を与えるという心的メカニズムの点で両者はつながっているのである。クービンの小説『裏面』とその挿絵を分析する第6章では、この画家にして作家の精神分析にたいする関心の重点が、夢から記憶へと移る過程をたどりつつ、その作品における幻想的なヴィジョンがフロイトのいう「夢の作業」や「遮蔽想起」の理論と密接につながってくることが指摘される。

（続紙　２　）

（論文審査の結果の要旨）

世紀末（正確には1900年前後）のウィーンの芸術と精神医学との深くて錯綜した関係を解き明かそうとする本論文は、とりわけ次の二点において高く評価される。まず、このテーマについてはもちろん少なからず先行研究があるものの、いずれも個々の作家やジャンルに特化した個別研究的な性格が強く、美術とデザインと建築とを同じ土俵に上げて包括的に論じたものは、本論文を除いてきわめて稀であるという点。次に、美術史や芸術学はもちろん、建築論、文芸批評、精神分析および心理学、進化論と退廃論などをめぐる当時の一次文献を広範に渉猟して議論を組み立てているという点である。

本論文は、全三部六章からなる。各部のタイトルは順に、「空間と身体」、「様式と装飾――退廃と進化」、「トラウマとトラウム」と銘打たれている。すなわち、第Ⅰ部の二つの章では、分離派館とサナトリウムに象徴される建築空間と、クリムトに特徴的な女性の身体表現がそれぞれ取り上げられる。第Ⅱ部では、モードとしての服飾デザインや「装飾」をめぐる当時の活発な論争の経緯が、分離派とアドルフ・ロース、さらには重要な批評家ヘルマン・バールなどの作品や言説を中心に、一次資料から丹念に跡づけられていく。第Ⅲ部では、本邦では論じられることが少ないにもかかわらず、きわめて特異な画家として評価の高いオスカー・ココシュカとアルフレート・クービンの絵画や小説が、同時代のフロイトの理論との密接な関係において再解釈されていく。

これらの議論によって明らかになった本論文のオリジナルな成果は、以下の六点に集約できるだろう。

１．当時を代表する分離派美術の展示建築（ヨーゼフ・マリア・オルブリッヒ設計）とサナトリウム建築（ヨーゼフ・ホフマン設計）という、一見してかけ離れた建造物が、「近代生活からの避難所」として類似した空間構成を有していたという点。しかも、両者を特長づける白い壁による立方体的な空間構成は、1929年に開館するニューヨーク近代美術館によって標準化される、いわゆる「ホワイト・キューブ」を先取りしているという点。２．当時から賛否両論を巻き起こしたクリムトによる女性表現は、「二大近代病」としての神経衰弱とヒステリーに触発されたものとして解釈しうるという点。とりわけ、ファム・ファタルがヒステリーに、ファム・フラジールが神経衰弱のイメージに対応するが、このように精神病理学を審美化することで、クリムトは、規範化され標準化された女性の身体表象を克服しようとしたと解釈される。

３．クリムトら分離派のメンバーはまた服飾をはじめとするデザインも手掛けて、いわば総合芸術を目指したが、それにたいしては、装飾に否定的な機能主義の側からの反論もあった。当時の言説等を詳細にたどりつつ、本論文はこの対立が、ダーウィンの進化論における「自然選択」と「性選択」のアナロジーにおいて解釈できるという独自の興味深い仮説を提示する。「芸術におけるダーウィニズム」という文脈を念頭に置くなら、これには一定の説得力がある。４．装飾がとりわけ女性の性的魅力と結びつくとするなら、装飾をめぐる当時の活発な論争、たとえば否定的なアドルフ・ロースと肯定的な分離派のメンバーたちのあいだの対立は、同じコインの両面と解釈することができる。すなわち、ダーウィンの「性選択」にフロイトの「フェティシズム」をめぐる理論を重ねて、「装飾」を、性的な欲望の代替的な充足手段としてとらえなおすことで、その否定の裏には欲望が、肯定の裏には防衛機能が隠れている、と考えられるわけである。

５．トラウマからの自己治癒やフェティシズムとの関係でのみとらえられてきたココシュカの人形愛や、その人形とのツーショットの自画像が、本論文では、この画家の本領でもある肖像画制作の一環として新たに解釈しなおされる。すなわち、対象に自己を投影させることで、仮構的な人格を与えるという心的メカニズムの点において、人形愛と肖像画の両者は密接につながっていると考えられるのである。６．クービンの小説『裏面』と、それにみずから付けた挿絵とは、これまでこの画家の分裂症的性格から病跡学的に解釈されることが多かったが、本論文では、夢の「事後性」や「二次加工」、「遮蔽想起」等をめぐるフロイトの理論を、クービンが自覚的にその制作に活かして、きわめて独自の幻想世界を築き上げていったことが明らかにされる。

このように本論文は、芸術の中心でもあり精神医学の揺籃地でもあった世紀末ウィーンに特異な文化様態を多角的に浮かび上がらせる点に大きな独自性がある。よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。

また、令和元年11月9日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。なお、本論文は、京都大学学位規程第１４条第２項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日：　令和　　年　　月　　日以降